



イエス団熊本地震救援対策本部通信

発行所: 社会福祉法人・学校法人イエス団 熊本地震救援対策本部

発行者: 対策本部長 平田 義

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通 5-2-20 TEL: 078-221-9565 FAX: 078-221-9566

vol. 2

http://www.jesusband.jp e-mail: honbu@jesusband.jp

2016/12/8

平素は、社会福祉法人・学校法人イエス団の働きにご理解、ご協力いただき厚く御礼申し上げます。

この度、4月14日、16日の「熊本地震」発生後、私たちイエス団では「イエス団熊本地震救援対策本部」を立ち上げ、4月28日には現地に義援金や支援物資を持って行き、今後の支援活動について話をしてきました。その後、支援依頼のあった熊本県西原村たんぼぼハウス（障がい者支援施設）を拠点に、様々な支援活動を続けてきました。今後も現地からの要請にできる限り応えていく予定です。今後とも、ご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

●イエス団の支援活動と今後について

【募金活動】

震災直後から皆様からお預かりした寄附金は2016年11月25日までに1,048,269円となりました。ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。お預かりした寄附金は、熊本県内の被害にあわれた施設や団体に義援金としてお届けしました。また、下記にご報告します通りイエス団職員の現地派遣の活動費としても使わせていただいております。

今後も目標額である300万円にむけてイエス団のすべての施設にて募金活動を実施してまいります。

【「イエス団熊本地震救援対策本部」より報告】

「イエス団熊本地震救援対策本部」では、「熊本地震」で被災された方々へイエス団の理念に沿った、イエス団らしい息の長い支援を行っていくために以下の内容を決議し、イエス団全体で取り組んでいくことを確認しています。

- 1. イエス団全体としての募金の目標金額を設定し、募金活動に取り組んでいく。
- 2. 被災地からの情報を集約し、各施設に情報を届け、思いの共有をはかっていく。
- 3. 被災地からの要請により、ボランティアの派遣を行っていく。

【熊本への派遣】

□第1回派遣（2016年4月28日～30日）

先遣隊として、平田常務理事、上内理事、小野事務局長、佐藤職員を派遣。

日本福音ルーテル健軍教会、熊本YMCA、益城町総合体育館、NPO法人NEXTEP、NPO法人にしはらたんぼぼハウス、被災地障害者センター熊本、日本基督教団武蔵ヶ丘教会、NPO法人あゆみを訪問し義援金をお渡しした。

□熊本県西原村 にしはらたんぼぼハウスへの継続派遣

（2016年5月9日～現在）

派遣者：馬嶋亮太さん（計5回）、佐藤雅裕さん、田中仰さん

小川祈実さん、森本大己さん、内山慎吾さん（計3回）

杉本基晴さん、櫻井聡さん

内 容：販売物の製造、調理、運転、配食、運搬、食堂運営補助

介助（排泄・移動）、掃除、洗濯、損壊家屋からの家財道具取り出し、訪問、など



【支援活動報告】

＜7月14日～23日 10日間＞

今回の熊本での活動で、初めて地震の被害を自分の目で見ました。今まで、映像でしか見たことがなかったので、目の前にしたときは、言葉が出ませんでした。今もそのときの気持ちを言葉に表すのが難しいです。

私がこのボランティアに行きたいと手を挙げたのは、私に何か出来ることがあればお手伝いしたいという気持ちよりも、震災後の状況を自分の目で見てみたいという理由でした。私より先に熊本へ行かれていた方の報告書を読んでいたときに「世界パレーを見て、「世の中は普通の日常が送られているんだね」と仰っていました。」と書かれていたことに衝撃を受けました。震災から1か月ほど経っていましたが、自分の中で震災のことをどれだけ意識していただろうかと考えると、何もしていない自分がいました。当たり前のように生活していました。突然襲ってきた非日常に、被災地はどうなっているのか、そこに住む人はどういった気持ちなのかを聞いてみたいと思いました。



たんぼぼハウスの裏

たんぼぼハウスを通して、たくさんの方との出会いがありました。仮設住宅へ支援物資を届けに行ったときにある1人との女性との出会いがありました。その方は子どもがいて、1人は発達障がいを持つ子、そしてもう1人は震災当時4ヶ月の乳児でした。一緒に配達へ行った方が「また何かあれば相談してくださいね!」という言葉をかけていました。その方の返事は「どこに、誰に、どれだけのことを相談していいのか分からない」でした。それから、震災直後の生活を教えてくださいました。

まず、避難所には行けなかったとのこと。私のためでなく、子どものために個室を開けてほしいとお願いしてみたが、他の方もいるから出来ないと言われたそうです。何人もいる集団生活の中に子どもと一緒にいるのは難しいと考え、断念して車中泊で過ごしたそうです。仕方なく車中泊でしたが、避難所ではないので避難所の配食などは受け取れなかったそうです。発達障がいを持つ子にとっては、避難所よりもとお考えになったそうですが、当時4ヶ月の乳児にとっては苦しい生活だったのでは、と思います。しかし、そうせざるを得ないという状況があったという事実にはショックでした。その後、市内の実家に身を寄せたそうです。しかし、そこで安心して生活というわけにはいかず、学校が再開すると実家から車で送迎することになり、次はガソリンにお金がかかってしまうという悩みにぶつかったそうです。仮設住宅に入居できたものの、子どもがいるため土日に開催される陶器市には行けず、紙皿を使っていると仰っていました。「東北から何も変わらない…」ボソツと言われた言葉でしたが印象的でした。

東北にしても、熊本にしても、自分の中でどれだけの意識があっただろうと改めて考えました。京都という土地で何が出来るだろうと考えます。

また、もし京都で震災が起こったら、と考えたときに色々な方の顔が浮かびました。自分自身のことだけでなく、障がい者施設で働く職員として出来ることは何だろうとも考えます。これは尽きない課題であり、施設として考えていきたいと思っています。熊本での経験を生かし、発信していけたらと思います。

(報告者：小川祈実 障がい児者ホームヘルプ事業「ゆうりん」)





たんぽぽハウスにも黄色紙が

<9月30日～10月7日 8日間 10月29日～12月10日 42日間>

熊本震災から半年近くにもなり、メディアは震災の様子をはやくも報道しなくなっている。にしはらたんぽぽハウスも震災後に帰宅困難者が宿泊していたり、水道も飲めなかったあの時に比べれば、職員やメンバー、そして多くのボランティアが体制を整えていったおかげで、今はやっと通常通りの物産品を作り続けることができている。震災時には市内で入院されていた方が退院され、西原村で過ごすことになり、たんぽぽハウスに通われることになった新規利用者が増えた。職員の数は変わらないのに、休日にもかかわらず、震災後の復興イベントで人手が必要なケースがあったり、施設長が講演会に出かけたり、テレビ

の取材が入ったりした際には、送迎や調理に人手が必要になるという現実も実際には起こっている。また体調を崩される職員がいたり、新しい震災後のステージに入っている様感じた。仮設住宅に移られている方は新しい仮設住宅での生活があり、今までの家に住んでいる方の多くはブルーシートが劣化し、屋根瓦から雨漏りするため、ブルーシートの張り替えを、今もなお必要とされている。ボランティアという立場で行く場合には、その期間出来ることを完結して行うことの大切さ、途中で引き継げないままやりっぱなしの状況があれば、そこで生活する方の負担になるということ学びました。また、施設長より靴箱が玄関にあればとの希望があがったので、イエス団から支援物資という形で購入させていただきました。復興にむけて、イエス団として順番にシフトをまわしていったこと、それぞれ活動者にも個性があり、個々の視点で関わられたのではないかと思います。3度も派遣させていただきありがとうございました。通いつづける大切さを、現地で出会った方々との交流でとても実感させていただいています。

(報告者：馬嶋亮太 重症心身障がい者通所「シサム」)



●募金のお願い

「イエス団救援対策本部」ではイエス団関係各所に対し、被災された方々への救援のための活動資金や義援金のため300万円を目標金額とし募金活動を行っております。あたたかいご協力をお願いいたします。

【募金振込先】

- ・郵便(ゆうちょ銀行)振替口座 口座番号：01140-8-75472 加入者名：社会福祉法人イエス団
- ・三井住友銀行 三宮支店 普通預金：9206516 口座名：社会福祉法人イエス団

* 通信欄に、「熊本地震救援募金」と明記してください。

熊本県西原村 にしはらたんぽぽハウス ～ 商品紹介 ～

イエス団が職員を派遣し、支援活動を続けている「にしはらたんぽぽハウス」は阿蘇の西原村にある小さな作業所です。こちらのコーナーでは「たんぽぽハウス」で作っている商品をご紹介します。イエス団の各施設でも行事の際など販売協力をしているので、皆さん商品を見かけた際は是非お手に取ってみてください。



柚子胡椒ドレッシング 350円



阿蘇俵山カレー 420円



ねぎ味噌ラー油 350円



柚子胡椒 300円

ミッションステートメント2009

わたしたちイエス団の実践は、1909年12月24日の賀川豊彦の献身に始まる。そして、イエスの愛に倣い、互いに仕えあい、社会悪と闘い、新しい社会を目指して多くの協働者とともに今日まで歩み続けてきた。この歴史を検証し、働きを引き継ぎ、今、わたしたちはイエスに倣って生きる。

わたしたちは、いのちが大切にされる社会をつくりだす
わたしたちは、隣り人と共に生きる社会をつくりだす
わたしたちは、違いを認め合える社会をつくりだす
わたしたちは、自然が大切にされる社会をつくりだす
わたしたちは、平和をつくりだす

2009年12月24日
社会福祉法人イエス団
学校法人イエス団